

浦賀文化

平成 21 (2009) 年 4 月 1 日

第 18 号

Email:uragabunka@yahoo.co.jp

編集・発行:横須賀市浦賀コミュニティセンター分館(浦賀文化センター) 〒239-0822 横須賀市浦賀 7-2-1 TEL&FAX 046-842-4121

うらがの寫眞館

浦賀の街並み



西浦賀商店街

この写真は昭和三十一年頃に紺屋町の十字路を撮ったものである。この当時は、終戦後の復興と共に浦賀船渠(現住友重機械工業)株も意気盛んなときで、港には四万トンのタンカーがひしめいていた。また紺屋町には房総半島の金谷行ききの汽船の発着所があった。このため浦賀駅から紺屋町行ききのバスも出ていた、そして遠洋漁業の基地として活気を帯びていた。海岸には魚市場もでき、何十本、何百本の鮪で市場は埋め尽くされていた。この頃、三浦半島でもいち早く花火大会が行われた。洒落た街灯が立ち並び、数多くの商品の看板が見られ、繁華街の様子を窺わせる。ここを「みなと商業会」と言った。

咸臨丸出港の碑

太平洋横断の快挙

咸臨丸は、日本人の操船により太平洋横断に成功した最初の船であり、浦賀とも深いつながりがあります。その浦賀、愛宕山公園の中腹の広場に、「咸臨丸出港の碑」が建っています。この碑は、日米修好通商百年を記念して、サンフランシスコの「咸臨丸入港の碑」と向かい合うように、昭和二十五(一九六〇)年七月に建てられました。

咸臨丸出港の碑は、花崗岩製で船体形、高さ九十五、百四十九cm、幅百八十三、二百五十cmです。表面には、当時の外務大臣藤山愛一郎の筆により「咸臨丸出港の碑」と刻まれ、裏面には乗組員九十六名の名が刻まれています。

安政五(一八五八)年、日米修好通商条約を締結した幕府は、批准書交換のためにアメリカ軍艦ポーハタン号で、新見豊前守正興を代表とする使節団をワシントンに派遣することにしました。この時、万が一の事故に備えて、軍艦奉行木村摂津守喜毅を指揮官として、勝麟太郎(海舟)、中浜(ジョン)万次郎、福沢諭吉、そして浦賀奉

事前に咸臨丸を調べると、補強や修理、塗装工事をする箇所があり、それにはドックの施設が必要でした。工事は鳳凰丸建造の経験のある浦賀奉行所に任せられ、河口に咸臨丸を引き込み、河口をせき止め排水し工事を行いました。これが日本で最初のドライドックです。修理を終えた咸臨丸は、一旦江戸に戻り、大航海へ向け、安政七(一八六〇)年一月十三日品川沖で錨をあげました。途中横浜で、難破し

たアメリカ測量船クーパー号のブルーク大尉以下十一名を乗せ、十六日の夕刻再び浦賀に入港しました。航海の必需品、水と生鮮食料、燃料などの積み込みを行なうためです。大型船が接岸をする施設のない時代、ポンプを持たない小舟から喫水の高い咸臨丸へ水を供給するのは大変な作業です。浦賀中の船が駆り出され、二十五石(四千五百リットル)入りの飲料用貯水槽二十四本、十五石(二千七百リットル)入りの桶三本、合計二十七本(一升瓶にすると六万本)を、七時間かけて行っています。これでも航海中に使用できる量は、一人当たり一日に僅か四・五リットルです。二日間をかけて準備を整えた咸臨丸は、一月十九日午後三時三十分浦賀を出帆しました。北太平洋の猛烈な時化(しけ)に遭い、操船も、外洋航海の経験も浅い日本人乗組員は船酔いなどで操船は難しく、十一名のアメリカ人乗組員が大いに力となりました。無寄港で航海した

咸臨丸(オランダ製:1857(安政4)年進水、ヤーパン号) 排水量625トン、全長26間1尺9寸(約49.7m) 全幅4間1尺3寸(約7.3m)、機関3本マストの帆(バーク型)と百馬力の蒸気機関(内輪のスクナーコルベット艦)、最大速度6ノット(毎時10km)、砲数12門、退役1872(明治4)年 咸臨丸入港の碑(サンフランシスコ) 昭和35(1960)年5月建立、入港100年を記念し、姉妹都市・大阪市がさらなる友好と日米外交100周年を記念として寄贈した碑。



愛宕山中腹の「咸臨丸出港の碑」

咸臨丸は、二月二十六日快晴のサンフランシスコ港に到着です。ちよんまげ姿の勇敢な侍たちは大歓迎を受けています。この航海は咸臨丸に大きな損傷を与え、帰国に際し約四十日間も修理の日数を費やしました。帆柱は新規、新しい備品を加え、万延元(一八六〇)年閏三月十九日サンフランシスコを出帆し、ハワイ・ホノルルに寄港。日本人だけで航海を終え、五月五日午前九時十分、帰国を祝うかのように青空高く威勢のよい鯉のぼりが林立していた、浦賀へ入港しました。往復一万六千六百六十五km余、百四



咸臨丸模型(浦賀文化センター)

十三日ぶりの故国日本です。船では貴重であった水、風呂に入るのもままならなかった乗組員は、何よりのご馳走となる「風呂にゆっくりつかる」を満喫したことでしょう。九十六名の乗組員の内三名が病に倒れ、故国へ帰ることが叶わず、サンフランシスコの丘で眠っています。また、碑の裏に「総員九十六名」と記されていますが、刻まれている名は九十五名、一名はどこに消えたのでしょうか。 参考資料: よこすか開国物語(山本詔一) 幕末軍艦咸臨丸(文倉平次郎) ふるさと横須賀(上)(石井昭) 他

東西風

三月に長いこと懸案になっていた「浦賀志録」を刊行することができました。「浦賀志録」を読む会から始めて、足掛け四年七十年を越える会を開いて、刊行にこぎつけました。

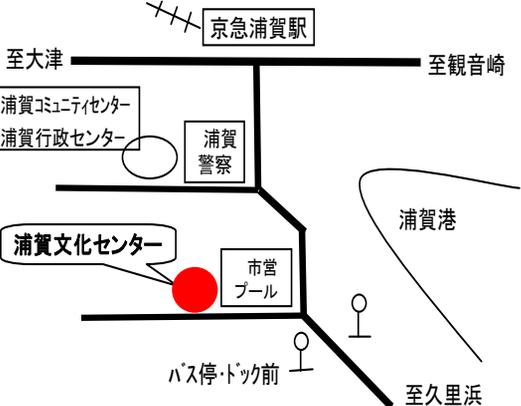
この本の著者である浦賀警察署の巡查であった加茂元善さんは、明治三十年代末に急速に衰退していく浦賀の町の姿を見て、歴史豊かな浦賀をこのまま放置することはできない、浦賀のよさを歴史の中に求めて、書き綴ってくれたものです。

どうかすると、歴史散歩の講師などになって、先生などと言われ、ちよつといい気になって、それ以上の勉強もしないでいる私を含めた者への大きな戒めかも知れません。「歴史の町・浦賀」を本当に再生しようと思っっている人、歴史の中に人の生き様をみつめ、町の将来あるべき姿を模索しようとするなら、じっくりこの本を読むことから始めましょう。

(山本)

浦賀コミュニティセンター分館 (浦賀文化センター)

浦賀駅から徒歩10分



所在地:横須賀市浦賀7-2-1 電話:046-842-4121 FAX:046-842-4121

浦賀の植物

ソメイヨシノ (バラ科)

寒かった冬から解放される花、春を告げる花、桜は国花とも親しまれています。

桜といえは花見、お酒も入れば「花より団子」となり話も弾み楽しい。浦賀近辺だけでもお花見の「隠れ名所」は多々あります。桜という一般的なソメイヨシノを意味しています。桜前線の基準木がソメイヨシノで明治以降は桜の代表になり、東京では九段の靖国神社の特定の桜の木で花の数を読まれることは公に知られています。

ところで植物の学名に少しふれてみたいと思います。ソメイヨシノの学名の基準木は東京大学植物園にあり、片仮名読みで学名はプルナス・エドエンシス。プルナスはサクランボの学名で二百種以上の種があるサクランボに共通します。エドエンシスは種小名となります。国立博物館の前身博物館の藤井寄命が千九百年、ソメイヨシノと命名しました。翌年の千九百一一年に東京大学植物園、初代園長松村任三教授が、Prunus yedoensis という学名を命名しました。ソメイヨシノは江戸末期に現在の染井村で作られた説もありますが、この点も、伊豆あたりではもともと以前からソメイヨシノがあったという説もあり、本当のことを確かめるのは難しいといわれます。が、現在ソメイヨシノの正体が何かははつきりしていません。幹が太く直立し、葉が大で、花が大きくて白く花部に毛がないのがオオシマザクラであり、エドヒガンは葉が小さく毛多く、花柱も毛多く花は小ぶりでべに色の特徴があります。ソメイヨシノはその雑種ということが確定されました。最近の細胞質遺伝子のRFLP分析の解明によると、エドヒガンがソメイヨシノの母親、オオシマザクラが父親(花粉親)といわれている。

東西浦賀を結ぶ渡し船に何度か乗ったが、その姿にすっかり魅せられてしまった。呼び鈴を押すと、向こう岸にいる船がいつでも迎えに来てくれる。船が棧橋を離れてもちよつと遅れた人があれば戻る。戻った船に乗る人は、先客や船長に声をかけながら乗ってくる。だから自然に、こやかな受け答え

笑話一題

が交わされる。今どきこんな温もりのある乗り物が他にあるだろうか。地元の人たちの大切な足となっている渡し船は、四人の船長さんが日替わりで運航している。横浜横須賀道路の浦賀インターチェンジができ一層便利になるが、御座船を模した愛宕丸は悠々背にゆつたりと今日も就航している。

大前悦宏

神奈川県植物誌調査委員会

ます。しかし、これも確定したわけではないようです。

最後に、日本では桜は九月を除いてどこかに咲いています。結婚式などで用いられるさくら茶は多いのが関山(カンザン)、つぎに普賢像(フゲンゾウ)といわれます。今年も桜は美しく咲いてくれることでしょう。

3月・4月 ソメイヨシノ
5月 ナラヤエザクラ



薄紅色の愛らしいソメイヨシノの花

- 6月 チシマザクラ
- 7月・8月 タカネザクラ
- 10月・12月 ジュウガツザクラ、コブクザクラ、シキザクラ、フユザクラ、シラユダザクラ
- 1月 リユウキユウヒザクラ
- 2月 カンザクラ

浦賀志録(上)発行

浦賀の歴史・地誌等を網羅し、明治42年7月に加茂元善氏が著した「浦賀志録」の復刻編集版が発行されます。編集委員の方々が4年の歳月をかけての作業が実を結びます。浦賀の辞書的な書、当館で閲覧ができます。

咸臨丸フェスティバル

日時:4月25日(土)
10時から(式典は11時から)
場所:住友重機械工業(株)
浦賀工場内および浦賀港周辺
日本人の操船で初の太平洋横断に成功した咸臨丸とその乗組員を称える式典。そして恒例の水恋乞いレースや浦賀開国パレード、たまごつかみ大会、レンガドック活用イベント(咸臨丸・産業遺産の資料展示、ジャズコンサートほか)、乗船体験航海(事前申込制)等々イベント満載。海軍カレーの販売、模擬店も出るよ。

◆歴史講座開かれる◆

1月21日から2月18日の水曜日全5回「中島三郎助を語る」と題し、山本詔一先生(横須賀開国史研究会会長)をお迎えし歴史講座を開催しました。

義を貫き、武士として果てた中島三郎助。生誕190年、没後140年にあたり、三郎助が残した文書などを通して、その多才な人物像が語られ楽しい講座となりました。定員60名のところ119名と多数の応募に感謝申し上げます。次回も皆様のご希望にかなう企画をしたいと考えています。



講座の様子

燈明堂ができた



歴史 語らい座・浦賀 ⑬

郷土史家 山本 詔一

浦賀港の入り口に建つ燈明堂。現在のものは平成元年に復元されたもので、下の石垣は燈明堂が建てられた当時のものとされ、史跡に指定されている。

燈明堂は慶安元年(一六四八)に江戸幕府が諸廻船の夜間航行の目印として建てたもので、この時の幕府の担当者、石川六左衛門重勝と能勢小十郎頼隆であり、灯し人足だけが東浦賀の村役として、干鯛問屋が勤めてきたと記されている。

もともと燈明堂創建の謂われは、慶安元年に記されたものは一つもなく、私が見たもので最も古いものでも享保期(一七二〇年代)の東浦賀の村明細帳であり、燈明堂が造られた時から八十年余り後のものである。どうして奥歯に物が挟まったような

物言いをするのかと言えば、幕府担当者の石川が、「寛政重修諸家譜」と、燈明堂が建てられる十年前に亡くなっている記載があり、横浜にある墓所を確認しても間違いないことがわかっていくからである。

さらに、近年友人に教示されたことは、静岡県の御前崎にあった燈明堂の由来にも、完成が慶安元年であり、幕府の担当者は上記の二人であるという。もし、この年に幕府が、太平洋岸の要所に燈明堂を造つたのであれば、その記述が幕府の正式な記録書である「徳川実紀」にないのは何故なのか。疑問は広がる一方である。

話を浦賀の燈明堂に戻して、造られた当時は三崎と走水に奉行所が置かれて、船改めをしているのに、なぜ走水でなく浦賀なのか。また、西浦賀の先端にあるのに、どうして東浦賀の村役で干鯛問屋が江戸時代を通して、面倒をみているのか。

疑問ばかりならべても埒があかないので、私なりの考えを述べてると、走水でなく浦賀に造られたのは、寛永十九年(一六四二)に株仲間を認められた干鯛問屋の動きと関係があるように思う。干鯛問屋が積極的

に動いたからこそ、浦賀に燈明堂ができ、その管理は干鯛問屋となったのであろう。また、太平洋岸の燈明堂設置はもつと以前の石川存命中に計画されたことであり、それが順次出来てきて、計画がほぼ完成したのが慶安元年であったと考えたが、どうでしょう。ご意見を……



平成元年3月10日竣工、復元された燈明堂
横須賀市指定史跡(昭和43年2月10日指定)

全高7.32m 建物高さ5.65m(1層3.25m 2層2.40m)
石垣底辺部4.50m、明治5(1872)年4月に役割を終えました。